

# BOOK REVIEW

## 農村問題と地域計画

M・パッシヨン著 石原潤 監訳

現在農業をとりまく社会経済的状況は急激な変化を示しており、それに伴い農村の変容も著しいものとなっている。農村は第一義的には農業生産の「場」であり、食糧の安定的な供給という役割を担っている。しかし社会の変化につれ、農村に求められる内容にも新たな要素が加えられるようになってきた。

環境問題が重視される今日では農業のもつ公益的な機能が再評価されたり、また農村景観そのものが重要な観光資源としての価値をもつようになった。このことは農村の振興がこれまでの農業生産の点からのみではなく、多様な側面

からの取り組みが可能であることを示している。つまり農村地域をめぐる政策環境が従来とは大きく異なり、全体として政策の関心が「農業」サイドよりは「農村」地域に拡散する傾向があるといえる。本書はこの傾向がきわめて顕著な英国を事例に、L・D・スタンブ以来の土地利用調査の実績をもつ地理学者の共同執筆により膨大な研究成果の整理とそれにもとづく提案がなされており、土地利用や雇用、住宅、農村計画など十章より構成されている。

このなかよりいくつかの興味ある点をひろいあげてみる。土地利用では、限られた空間を有効に利

用し、かつ保全と利用が両立する多目的な土地利用が可能かどうかを検討する方法として農業と他の利用との間の競合と適合のマトリックが考えられている(第二章)。

さらに、英国農村に共通する問題を集約する概念として、また計画の用語としても定着している機能剥奪 (Deprivation) をもつ、人口と雇用、住宅、交通とアクセシビリティなどがとりあげられている(第四、五、六章)。すでにサーピス業を中心とする第三次産業部門が唯一の成長部門であるのに対して、雇用政策の基調が依然として製造業にあることの矛盾や、英国南東部にみられる農村への人口流入が今後一般的なものになれば、都市の社会資本の放棄と同時に農村の景観の質の変化や食糧生産への影響が懸念されている。交通では自家用車の有効的な利用と多面的な交通目的をもつ公共交通の提案がみられる。

Town & Country (都市・農村) 計画法以後の制度的な変化と、多様な利害と権限のもとで、農業、社会的サービス、アクセスや住宅および雇用の統合的な計画を地域の特性を考慮していかに一貫したシステムとして発展させるかという点が考察されている。

ここに示されている問題はわが国にも共通する点も多く、提案も示唆に富むが、同時に英国特有の状況も考慮する必要がある。すなわち英国人の Countryside に対する特別な文化的、社会的価値の付与、食糧自給政策との関連で農地の喪失が問題とされたが、現在では穀物の余剰の時代となっており、併せて八〇年代以降には民間資本の積極的導入が農村計画にもみられるようになった。全体に内容はわが国の農村計画にとって新たな視点からの提案と考えられ、参考になると思われる。

(古今書院発行 一九九二年五月刊 定価三、二〇〇円)

評者

北海道教育大学

教授 山下克彦